

第64回ミラノサローネ国際家具見本市記者発表会

今年4月21日から6日間開催されるミラノサローネ国際家具見本市（以下、ミラノサローネ）は、1961年度の初回から数えて第64回目を迎えます。今号のミラノ通信では、デザインの歴史と共に歩んできたこの見本市が、世界の秩序や価値観が急速に変化する今、どのようなメッセージを発信しようとしているのか、生の声から今開催の空気感を探してみたいと思います。

1月末に、ミラノ・トリエンナーレ美術館にて、早くも記者発表会が開催され、会場となったシアターが満席になるほど、多数のジャーナリストから高い関心が寄せられました。

オープニングには、今年のキャッチフレーズ「A Matter of Salone」をテーマに石や木、海綿や花びらなど素材の表情を精緻に捉えたコミュニケーションキャンペーンのビデオが流され、ムードを盛り上げます。

展示内容の紹介の前に、要人のスピーチがあり、各々の言葉からミラノサローネというものがどのようなものなのか、これまでになく明確に浮き彫りにされました。

今回の会場となったトリエンナーレ美術館の会長建築家 Stefano Boeriは、ミラノサローネとトリエンナーレ美術館は単なるパートナーではなく、デザインのクオリティと創造性を創出するプロジェクトのジェネレーターとして互いにコラボレーションしながら、年々その絆を強めている、と強調。

ミラノ市のGiuseppe Sala市長は、ミラノ市を発展させる、という市長の視点から、ミラノサローネが行なってきた活動の重要性を語ります。特に、「この見本市の大きな特徴は、その集客力から生まれる経済効果だけでなく、時代の要求に応じて変化を成し遂げる柔軟な姿勢」だとしています。また、「例えば、不況で困難に直面する家庭が増えている現状に応じるために『Salone Contract』という新しい企画を生み出すなど、類まれな先見の明を持つリーダーたちのおかげで、毎年、人々の心に届く新企画が考案され、困難を乗り越えるために流動的で常に新鮮なシステムを生み出し、デザインの街ミラノを世界へ知らしめてきた、その意義は大きい。ミラノには良い点も悪い点もありますが、協働の精神だけは失うことはありません」とミラノ人の気質を強調し、スピーチを締め括りました。

執筆 池田美雪

ミラノ在住デザイナー



©Motel409

「A matter of Salone」

3人のフォトグラファーと複数のクリエイターのコラボレーションからつくり出されたコミュニケーション・キャンペーン。



©Comune di Milano, CC BY 3.0 it

ミラノ市々長 Giuseppe Sala。

テクノロジーの行方

記者発表会の司会進行を務めたビジネス・フューチャリストのAlberto Mattielloが、自らが携わるイノベーションとテクノロジーが、ビジネスを行なう我々の能力にどのように影響を与えるかをこれまで見てきた経緯から、まさに今、私たちに大きな影響を与える現象が起きていることを、エピソードを交えながら非常に分かりやすく語ってくれました。将来のデザインの方向を示唆するとても興味深い内容でしたので、全て紹介させていただきます。

「いつの時代でも、テクノロジーのパラグラムが変わると、私たちの行動と私たちが抱く期待感は変化し、必然的に市場はこれらに呼応するために新しいテクノロジーやサービスを提供します。一つの例として、自分が暮らすUSAのマイアミ市内で、数ヶ月前から『月々500ドルで、ロボットがハウスクリーニングを代行します』という屋外広告が目につきます。完璧なオートマチックなロボットではないにしても、このことから、新しいコンセプトが生まれたことがわかります。つまり、近い将来ロボットなどのシステムが私たちとコラボレーションし、ハイブリッドな同居スタイルが確立されていくことでしょう。このコンセプトの目的は明確で、家の片付けや清掃などのあまり気の進まない作業は機械に任せる、という生活システムを確立させることです。言い換えれば、贅沢の概念が、物を持つことから、時間を獲得することに移行します。そうなった時に、デザインには何が起きるのでしょうか。きっと、製品をデザインすることから、テクノロジーと共有するある種のライフスタイルをつくり出すことに移行していくに違いありません。もう一つの変化は私たちにインパクトを与えるAIの進化です。これまで以上に私たちとAIの関係はより親密になります。私たち自身を学び理解し、両者の相互作用はさらにパーソナライズされていきます。超パーソナライズされたAIへの私たちの期待は膨らみ、さらに物質的な空間へもこの現象を求めるようになります。そうすると、ニュートラルであったりスタンダードな空間ではなく、個性のはっきりとした唯一無二の稀有なモノを求めるようになります。テクノロジーの文化的な解答の一つは、この唯一無二性だと言えるでしょう。最後に、より快適により長く生きることを手助けするAge-Techというテクノロジーも、今後浸透していくに違いありません。住居の中では、今年の隔年開催見本市でもあるバスルームが、それらが導入される格好のス



©Salone del mobile.Milano

私たちとテクノロジーのこれからの関係について、今後のシナリオを語るAlberto Mattiello。



©elledecor.com

ヒューマノイドロボットが、面倒臭い家事を代行してくれるイメージ画像。



©Salone del mobile.Milano

「Age-Tech」は、今後ますます進化する分野。



©smartius.it

長く健康に生きるためのサポートとして、テクノロジーを活用した高齢者の手に届くこれまでにない新製品が、続々とデザインされるに違いない。

ペースとなります。ミラノサローネは、まさに、こうしたトレンドのアンテナであり、文化を幅広く共有する場なのです。」と、最後はミラノサローネとテクノロジーの構図を示してくれました。

ミラノサローネの決断

5年前からミラノサローネを力強く牽引するMaria Porro代表が、今年のコネプトと構成を具体的に紹介してくれました。

今年のミラノサローネはキャンペーンイメージの如く「生きた素材」からできており、その素材とは「今私たちが身を置いている複雑な状況を解釈し、様々な要素や工業活動、サローネの核である手工業と文化の次元、また非常に重要である国際的な反映を念頭に置き、プロジェクトの形態をつくりあげていく能力。」です。

「変化を読み取ることはさらに重要になります。今開催にあたり大きな決断をしました。それは、極めて複雑な国際情勢の中にあって、変化に対し即座に反応するのではなく、一旦立ち止まり、深く理解をし、変化の方向を読み取り、プロジェクトカルチャーの視点に立って、ミラノサローネといった大きなマニフェストを変革させることです。つまり、ミラノサローネが変革的な次元を受け入れる、という挑戦です。」

今年、毎年開催見本市である、サローネ国際家具見本市、国際インテリアアクセサリー見本市、Workplace3.0、S. Project、サローネサテリテ、そして隔年開催のEuroCucina（サローネ国際キッチン見本市）、FTK-テクノロジー・フォー・ザ・キッチンそしてサローネ国際バスルーム見本市が繰り広げられます。

併催は「Salone Raritas」「Aurea-an architectural fiction」「A Luxury Way」「Salone Contract」の4つです。

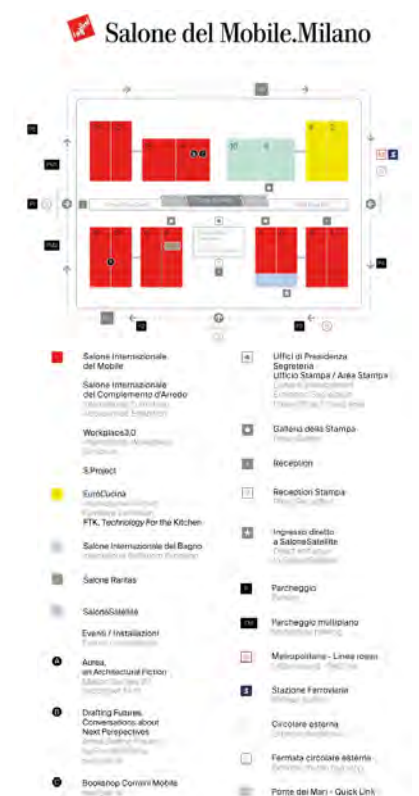
ユネスコ無形文化遺産のイタリア料理

昨年末、イタリア料理が無形文化遺産としてユネスコに正式登録されたことをご存知の方も多いでしょう。この度の登録は、ピッツアやトリュフなどの単体ではなく、イタリア料理の食文化すべてが対象となりました。食材の栽培や調達、そして料理方法など、世代を超えて受け継がれてきた地域社会の文化全体が評価されるという世界で初めての快挙とな



©Socialrise

Maria Porro代表。1983年生まれ。2015年にイタリアの歴史あるデザインブランド「Porro」のマーケティング・コミュニケーション・ディレクターに就任。2019年にAltagamma財団の理事、続いて、2020年9月には、イタリアの家具メーカーが集結するアッサレード（FLA / イタリア家具工業連盟の家具部門）の代表に就任。デザインに専念する前の10年間は、ブレラ美術アカデミーで空間演出デザインの学位を取得し、デザイナー、オーガナイザー、キュレーターとして、劇場、芸術、主要なイベントに携わり、世界中のイベントを手がけてきた。



り、そこには、一軒一軒の家庭で調理される料理も含まれているのですから、イタリア国民は沸き立っています。こうしたタイミングに開催されるEuro Cucinaは、特に注目を浴びるに違いありません。

記者発表会にはEuro Cucinaを象徴して、料理・社会・サステナの関係については、イタリアで今最も発言力を持つ、ミシュランの星を獲得した女性シェフ兼活動家Cristina Bowermanが登場し、今のトレンドを示唆してくれました。南イタリア出身の彼女は、幼少の頃のキッチンにまつわる思い出として、家から漂うアーティチョークの酢漬けの香りや揚げ物の油の匂い、庭のジャスミンの花の香りなど、料理そのものではなく、匂いと結びついた情景が記憶に残っていると語りました。また、「現代の、特に都会のキッチン空間は年々スペースが小さくなっており、限られたスペースをいかに活用するかが大きな課題です。そうした観点から、最近印象に残ったキッチン空間のプロジェクトがあります。スマートなカウンタートップに、鍋つかみのようなプレートが無造作に置き、場所を気にすることなく加熱調理を始められる、という今までにないシステムです。また、ヘルシーな生活スタイルは年々その重要性が高まっており、特に年齢を重ねるごとに人は、より健康でありたいと願います。ヘルシーな調理法の一つに蒸し器がありますが、ビルトインされたシステムもデザインされています。設計した人は、グローバルで広い知見を持っているに違いありません。新しいトレンドはこのように、日常の中で何を食べるか、また食べることをどのくらい重視しているか、どのくらい健康に気を配るか、という人それぞれの意識により、経済的というよりむしろ文化的な視点から社会的地位が決まる、という流れです。テクノロジーとデザインがサポートし、このようなプロジェクトが実現できることを私はとてもうれしく思っています」と語りました。

個性豊かな企画の数々

「Salone Raritas」は、スタンダード化された工業製品の対極にある、アイデンティティや唯一無二性に対する要求に応えるために、コレクトするデザインプロダクト、アンティーク、クラフトにフォーカスする企画です。

キュレーターのAnnalisa Rossoは「世界各地で年々増していく要求を満たすための答えとして、長い年月に渡って考察



©masaf.gov.it

イタリア料理がユネスコの無形文化財に登録されたことを祝う、農業・食料主権・森林省のサイトの画像。



©salonemilano.it

Cristina Bowerman。彼女の料理は、伝統、文化、記憶、場所など様々な要素のミックスで味が語られる。2025年のミラノエキスポでは、食の持続可能性への取り組みにより、アンバサダーに選ばれた。



©Federica Lissoni

Salone Raritas出展作品の一つ

されたプロジェクト」と、これまでの道のりを語りました。コレクションするカテゴリーに依らず、珍しく、特別で、それ自身が貴重なオブジェが、アートギャラリーなど25の出展者により展開されます。

昨年開催された、壮大なインスタレーション「Villa Héritage」の続編とも言える、「Aurea - an architectural fiction」。「Villa Héritage」は、歴史的に名を知られる高級ホテルなど、ラグジュアリーなインテリアデザインを40年以上にも渡り手がけてきた、フランス人デザイナーPierre-Yves Rochonがクリエイトしたインスタレーションです。伝統と革新を結びつけることのできる普遍的な言語としてのデザインを考察し、過去と未来の対話を促進し、生きることの意味と芸術的創造について考えるきっかけを与える場としてデザインされました。イタリアの贅を尽くした新ホール「A Luxury Way」内で、今年もフランスのスタジオMaison Numéro 20を率いるインテリアデザイナーOscar Lucien Onoが芸術性の高いインスタレーションを手がけます。忘れ去った記憶の旅、ビジターが旅行者となる空間をコンセプトに、インテリアデザインと芸術的ビジョンを融合させた、物語的な空間の連続として形作られる架空のホテルです。

長期的な戦略プロジェクトとして誕生した「Salone Contract」。今年は、2027年の本格的なスタートに向けて開催されます。コントラクト市場は今、単一の製品から、システム、専門知識、データ、サービスを統合する能力へと、その価値が移行しています。そうした中でミラノサローネが新しく取り組むのは、急速かつ大きく変化するコントラクト市場の複雑さを理解し、解釈することです。

Salone Satelliteは「Skilled Craftsmanship+innovation」をテーマに、今年で27回目を迎えます。例年通り、審査を通過した若手参加デザイナーは700名、その中でも日本人デザイナーは3年連続して最多を記録します。ちなみに、昨年、第14回サローネサテリテ・アワード2025の第1位を受賞したのは、日本のデザインスタジオ、SUPER RATの長澤一樹による「UTSUWA - JUHI SERIES」です。歴史と文化を守るために日本の工芸を再解釈したもので、「棕櫚（シュロ）の樹皮」を主な素材とし、伝統的な染色技法「柿渋染め」と、廃棄される鉄屑から抽出した「鉄媒染液」を掛け合わせることで、多様な形を可能にし、環境への生産負荷を削減したことが評価されました。

ミラノ市内では、昨年のスフォルツェスコ城内ロンダニーニのピエタ美術館にて開催された、米国演劇家Robert Wilsonの「Mother（マザー）」に続き、市内の芸術的遺産の価値を高める企画が用意されています。

今年の見本市も、ミラノ人の先を見通す力、そしてそれを創造性に変換するブレインたちが、伝統、テクノロジー、サステナ、人と人の絆をキーワードに、大きな夢と希望を世界へ発信してくれることでしょう。



©illustration_MN20

架空のホテルを描く「Aurea - an architectural fiction」の一室、レンダリング。



©salonemilano.it

第14回サローネサテリテ・アワード2025の第1位受賞作品とデザイナー長澤一樹。

執筆者 略歴

池田美雪 インテリアデザイナー
武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒
Istituto Europeo di Design 建築インテリア科卒

1994年よりミラノ在住 個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わったのち
2005年より クリエイティブ・コンサルティング会社（デジタルゲーム、ウェブサイト、
グラフィックデザイン、アプリ）の共同経営者として活動

デザイン・アートに関するプロジェクトコーディネイト、翻訳および通訳
mikedata.it